

- 本地域は八郎潟干拓地にあり、平成19年度、大潟村の全農業者を構成員として、大潟村大潟地域農地・水管理保全管理協定運営委員会（以下「大潟農水環委員会」という。）が組織された。
- 地域の交流を活性化し、共同活動への地域理解の増進を図ることを目指し、令和6年度から新たに社会福祉サービス事業所「大潟つくし苑」、「農福連携サポートつくし」、園幼保連携型認定こども園「大潟こども園」と連携し、サツマイモの栽培とサツマイモを使った製菓の取組を実施。サツマイモの収穫時には、総勢50名超が参加。
- 大潟農水環委員会、大潟つくし苑等双方において今後の活動の更なる展開への期待感につながっている。

## 【地区概要(R6年度時点)】

- ・取組面積 11,480ha  
(田 11,131ha、畑 349ha)
- ・参加集落 1集落
- ・資源量 農道438.5km
- ・主な構成員 農業者、自治会、婦人会、子供会、土地改良区、JA、学校、PTA、
- ・交付金 約196百万円

## ー 連携がうまくいっているポイントは何でしょうか。

(委)「サツマイモの栽培とサツマイモを作ったお菓子作りということで、具体的な活動内容を示しながら提案しました。」

(つ)「提案いただいた活動内容は既然大潟つくし苑で行っている作業内容の延長で行えるものだったので、うまくマッチできたと思っています。これまで施設でやったことのない新たな作業であれば、もう少し大変だったのだらうと思います。」

## ー 連携によってどのような変化がありましたか。

(委)「これからも『変えていきたい。もっと別の交流もしていきたい。』という気持ちが大いんです。

現在はシルバー人材にお願いしている年間を通じた栽培管理の作業もこれからは大潟つくし苑にお願いしていきたいと考えているんです。どうですかね。」

(つ)「できると思います。施設としては、利用者さんに様々な生産活動機会を提供することが必要なのですが、大潟農水環委員会さんとの連携によって新たな作業の選択肢が増えたのでありがたいと思っています。今年は、利用者さん方から『そろそろサツマイモの時期だね』といった(楽しみにする)声も聞こえてきています。」

(委)「大潟つくし苑さんともう少し何かできないか検討していこうかと思っています。多面的機能支払は草刈り等がメインの活動なんですけど、こういった連携活動が村の広報誌の表紙で取り上げてもらえると、多面的機能支払ってこういうこともやっているんだなと多面的機能支払の活動全体への地域の理解増進にもつながっていくと思っています。」

## ー 農福連携を考えている他の地域へのメッセージなどいただけますでしょうか。

(委)「地域によって環境も状況も違うので、それぞれの地域でできそうなことは何だろうかと考えていくということだと思います。」

(つ)「施設が『何をしているところなんだ』という情報が近隣住民になかなか行き届かないことも多いと思いますが、交流によって知ってもらえることにもつながっていくのではないかと思います。何をしているところなのか知ってもらえれば、その先の更なる連携活動もうまくいくのではないかと思います。」

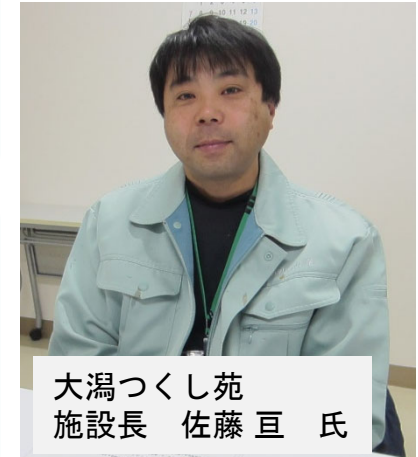
(委) : 大潟農水環委員会  
(つ) : 大潟つくし苑



大潟農水環委員会  
佐野 秀明 氏



大潟農水環委員会  
三戸 悟 氏



大潟つくし苑  
施設長 佐藤 亘 氏

## 連携のきっかけ (R5)

- ・大潟農水環委員会では、前身制度創設時の平成19年度から活動を開始。平成26年度から「多面的機能の増進を図る活動」（増進活動）にも取り組んできた。
- ・地域の交流を活性化し、共同活動への地域理解の増進を図ることを目指し、増進活動として地域内の福祉施設等との連携を検討。

## Step 1 (R5)

### 取組内容の調整

- ・県の多面支払の担当に大潟つくし苑、農福連携サポートつくし、大潟こども園等との連携の構想を相談。県からは良い取組だと後押し。
- ・大潟農水環委員会から大潟つくし苑等に活動内容案を示し、連携を提案。協定に参加する形で調整し、総会で合意形成。

## Step 2 (R6)

### 取組の実施に向けた準備

- ・サツマイモ栽培用に集落内の農業者から稲の育苗ハウス半棟ほどのスペースを借りる調整。
- ・サツマイモ栽培に関する技術的指導ができる方の派遣をシルバー人材センターに依頼。
- ・マイクロバスを借り上げ、大潟こども園から育苗ハウスまでの園児たちの移動手段等を確保。

## 大潟つくし苑、サポートつくしの概要

- ・平成20年に大潟村で開所し、生活介護と就労継続支援B型の事業を実施。近隣市町村と村内の利用者が通所。就労継続支援B型では、製菓作業、農作業等の作業機会を提供。
- ・令和元年に大潟つくし苑から分離する形で「農福連携サポートつくし」を開所。農福連携に特化し、地域の農業者とともに農作業に従事できる作業機会を提供。

みんなで耕そう!

ノウフク

NOUFUKU PROJECT



(左) コミュニケーションが少し苦手な利用者さんも、農福連携サポートつくしの支援員のサポートにより安心して畝作りの作業ができています。



(上) サツマイモの定植では、園児たちと農福連携サポートつくしの利用者さんが交流する姿もあり、にぎやかな雰囲気で行われました。



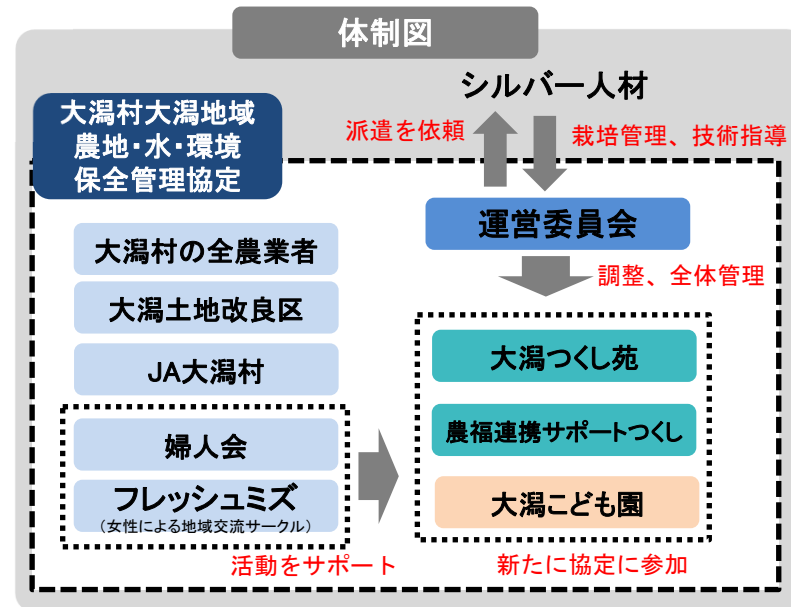
(上) 収穫したサツマイモでクッキーやスイートポテト等の焼き菓子を製造。園児たちにも喜ばれています。



### 【主な交付金の使途】

- ・参加者への日当の支払
- ・土地の利用料、苗代
- ・バスの借上げ、保険

## 体制図



## Step 3 (R6)

### 初年度の取組

- ・畝作り、サツマイモの定植、収穫の年間計3回の作業に、農福連携サポートつくしから利用者2～3名と支援員1～2名が参加。支援員が間に入る形で、シルバー人材の指導の下作業を実施。
- ・定植及び収穫作業には、農福連携サポートつくしのほか大潟こども園の4歳児クラス約20名と教員も参加。婦人会等も参加し、園児たちの作業をサポート。
- ・収穫したサツマイモは、大潟つくし苑でペースト状に加工して冷凍保存。大潟つくし苑において作業時期を調整しつつ製菓作業を行い、大潟こども園に配布するとともに道の駅、スーパー等に納品。

## Step 4 (R7)

### 今年度の取組

- ・昨年度に引き続き取組を実施。
- ・大潟村広報誌にも取り上げられ、地域の活動として定着しつつあると実感。



## 今後の展望

- ・現在はシルバー人材に依頼している年間を通じたサツマイモの栽培管理についても、今後は農福連携サポートつくしが行い、連携活動の回数を増やしていく予定。
- ・サツマイモの栽培以外にも新たに連携した活動を実施できないか模索していきたい。

- 多面的機能支払交付金の前身制度創設前から、混住化や高齢化により荒廃が進んでいた里山再生に向け、有志が中心となって農道の歩道部分を木材チップで被覆することにより景観形成に取り組み。こうして整備した農道は「鹿田山フットパス」として地域住民等も日常的に利用するように。
- この活動が母体となり、平成18年に鹿田山環境保全ネットワークを設立して前身制度に参加。渡良瀬特別支援学校も参画し、遊休農地を活用したサツマイモ、菜の花の栽培や鹿田山フットパスの保安全管理などを実施。平成29年度、大間々用水土地改良区が事務局を担う形で近隣2組織を含む「鹿田山広域協定」を設立するとともに、鹿田山環境保全ネットワークをNPO法人化。
- 連携した活動を通じ、鹿田山環境保全ネットワークを始めとする活動参加者と渡良瀬特別支援学校が相互に活力、成長、感謝など良い影響を与え合い、鹿田山地域の保全と未来に繋がっている。

【地区概要(R6年度時点)】

- ・取組面積 320.2ha  
(田 73.4ha、畑 246.8ha)
- ・資源量 水路119km、農道162.6km  
ため池5箇所
- ・主な構成員 水利組合、自治会、高校、特別支援学校、幼保園、土地改良区等
- ・交付金 約17.2百万円

(広) : 鹿田山広域協定事務局  
(大間々用水土地改良区)  
(学) : 渡良瀬特別支援学校

一 連携した活動を行うことによってどのような影響を感じていますか。

(広) 支援学校は保全活動の主力メンバーです。生徒たちが頑張っているのに遊んでいるわけにいかないと大人たちがみんな力を貰っているんですよ。

(学) 地域と密着して毎日のように活動できるので、地域から頼りにされているという意識を持つことができます。作業に行くと「ありがとう」や「ご苦労様」と声を掛けてもらえ、生徒たちもそれを楽しみにしていますし、誇りや自信、自己肯定感に繋がっていると思っています。

一 活気を保ちながら長期にわたり連携活動を続けられているのはなぜでしょうか。

(広) 私たちは支援学校を「核となる施設」と捉えているんです。実際、支援学校が多面的機能支払の活動を引っ張っていく核になっています。鹿田山は、農地だけでなく、里山があり核となる施設があるからいろんな人が興味を持って集まれる場所になっていると思っています。



【→】

わたらせ

渡良瀬特別支援学校

【←】

おおま

大間々用水土地改良区  
(鹿田山広域協定事務局)

(右) 顧問 細野安高 氏  
(左) 主任 堀田貴志 氏



(中) 校長 近藤千香子 氏  
(右) 教頭 星 裕貴 氏  
(左) 教員 齋藤和明 氏

一 今後の展望を教えてください。

(広) 将来的な目標として鹿田山環境保全ネットワークで福祉事業に取り組もうと考え、NPO法人化しました。卒業後の受け皿として例えば就労継続支援B型事業所を立ち上げ、今の活動をもう一步先に進めていける仕組みを作れないかと組織内で話をして準備を進めているんです。

生徒たちが参加できる作物体系を考え、収量や収益にはこだわらなくたっていいかなというのが私のイメージです。

(学) 卒業後も同じ鹿田山でこれまでの経験を活かせるという就労までの一貫したモデルができれば、とても魅力的で良い話だと思います。実際に就労しなくても、生徒が初めて就業体験をする場にもなり得ると思います。

やはり課題は就労先で、合う合わないがあり、環境が変わると人に対する態度や思いやりの心がガラッと変わってしまうことがあります。鹿田山では生徒たちがゆったりと生活できており、環境を変えずにこの流れの中で卒業させてあげたいなという思いがあります。

実現するのはすごく大変ですが、同時に、これまで生徒たちと共に活動に携わってきて可能だろうとも思います。

(学) 学校としても、ユネスコスクールとしてより主体的にどのような活動ができるのか考えていきたいと思っています。

## 連携のきっかけ（活動開始当時）

- ・当時の大間々用水土地改良区副理事長や有志が中心となって実施していた荒廃が進む地域の再生に向けた活動が母体となり、平成18年に鹿田山環境保全ネットワークを設立し、前身制度の試験的事業に参加。
- ・当時の同改良区職員の家族が渡良瀬特別支援学校に在学しており、遊休農地での菜種播きイベントへの参加を呼び掛けたことで連携が開始。

## Step 1（活動開始当時）

### 活動内容の調整

- ・大間々用水土地改良区が調整役となり渡良瀬特別支援学校と活動内容を検討し、遊休農地を活用した菜種播きイベント及びサツマイモ栽培、鹿田山フットパスの保全管理の活動を開始。

## Step 2（H29～H30）

### 広域化・NPO法人化

- ・大間々用水土地改良区が事務受託等を通じて携わってきた近隣2組織を含む鹿田山広域協定を設立。同改良区が事務局に。
- ・福祉事業を構想し、鹿田山環境保全ネットワークをNPO法人化。

## Step 3（R7）

### ユネスコスクールに承認

- ・これまで鹿田山環境保全ネットワークと共に取り組んできた活動がSDGsと親和性が高いことから、渡良瀬特別支援学校がユネスコスクールとして承認。

## 渡良瀬特別支援学校の概要

- ・昭和54年度に群馬県立渡良瀬養護学校として開校され、平成27年度から群馬県立渡良瀬特別支援学校に名称変更。
- ・「児童生徒一人一人の能力や個性を尊重し、明るくたくましく生きる人間を育成する」ことを教育目標に掲げ、知的障害を有する児童・生徒たちに対し、通学又は訪問により日常生活、教科学習、作業学習など各児童・生徒の興味や能力に合わせた教育を提供。
- ・令和7年4月にユネスコスクールとして承認（※）。

（※）ユネスコの理念を学校現場で実践するため、1953年に発足した国際的ネットワークであるASPnet（Associated Schools Network）が加盟を承認。日本では、ASPnetへの加盟が承認された学校を「ユネスコスクール」と呼称し、全国1,083校が該当（2025年9月時点）。



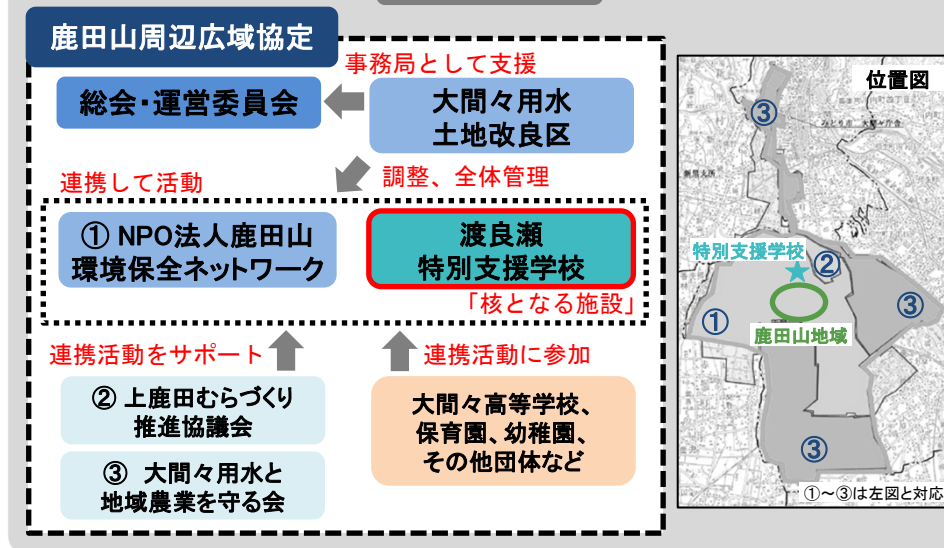
### 【生徒たちが取り組みやすい活動のポイント】

- ・手順が決まっている作業
- ・視覚的に成果が分かりやすい作業
- ・もっとこうしたい等の意欲を引き出せてステップアップに繋がれる作業



サツマイモの苗植えは、穴掘り、苗植え、全体確認等で作業を分担し、障害が重い生徒から軽い生徒まで全員で行うことができる。

## 体制図



## Step 4（近年）

### 現在の活動

- ・これまでの活動に加え、綿花の栽培も開始。
- ・菜種播きイベントは学校全体（約260名）で実施。このほか近隣の保育園や幼稚園5園、地域住民や団体等の580名超が参加。
- ・サツマイモ栽培は、大間々高等学校との交流機会も設けながら高等部全体（約120名）で実施。畝作りは環境保全班を中心に実施し、苗植えや収穫は保育園や幼稚園、地域住民や団体等も参加。
- ・鹿田山フットパスのチップ敷きは高等部全体及びその保護者、地域住民や団体等が参加して実施。実施後には上鹿田むらづくり推進協議会のサポートにより昼食会を開催して交流を深化。
- ・これらのほか、高等部で班別に行う「作業学習」の課程で環境保全班全13名が草むしり、トイレ清掃、チップ敷きの3グループに分かれて年間を通じてほぼ毎日鹿田山フットパスを維持管理。

大間々用水土地改良区が事務局として日程調整や資材準備等を実施

### 【主な交付金の使途】

- ・農作業場となる遊休農地の借上げ
- ・チップ材、苗、飲み物 等



鹿田山フットパスは、イベント的なチップ敷きに加えて環境保全班が日常的に管理することで良好な景観を維持。利用者も拡大。

## 今後の展望

- ・引き続き連携した活動を行うとともに、渡良瀬特別支援学校として小・中学部の活動の拡大やユネスコスクールとしての更なる活動の展開をより能動的に模索していく。
- ・卒業後も鹿田山地域で活躍できる場として就労継続支援B型事業所等の開所を構想している。

いしかわ  
うるま市石川地域資源保全の会（沖縄県うるま市）

- 畑地帯である石川地域において、主に農道の適切な保安全管理に向け「うるま市石川地域資源保全の会」が組織され、多面的機能支払交付金の前身事業から活動を開始。
- NPO法人<sup>たいむ</sup>大夢により、農作業を通じた就労支援を行う場として平成24年度に就労継続支援B型事業所「大夢」が、翌年度にはA型事業所「プチ大夢」が開所するも、作業場となる農地の確保が難航。地域の理解増進に向け、うるま市石川地域資源保全の会の草刈りにプチ大夢も参加。参加者の自信に繋がるとともに、草刈りを通じて農業者との相互理解が図られ、農地の確保にも寄与。
- 現在もプチ大夢は草刈りの主戦力となっている。

【地区概要(R6年度時点)】

- ・取組面積 120.4ha  
(畑 120.4ha)
- ・資源量 水路1.6km、農道26.8km
- ・主な構成員 農業者、土地改良区
- ・交付金 約1.5百万円

一 連携した活動を行うことによってどのような効果を感じていますか。

(保) コロナ禍以降農家さんの参加がだいぶ減ってしまっている中で、うちの団体の活動が成り立っているのは大夢さんのお陰です。

(大) 草刈りとか、ちょっと手伝ってくれんかと話があった所に人を入れるようにしていったら、そこから農地を貸していただいたり仕事をいただいたりの流れができて、win-win以上の関係を作らせてもらっています。障害者でも働けるというのを分かってもらえたのが一番大きいかなと思います。

それと、松田さんが名前を呼んでくれるのでメンバーさんも喜んでいて、これまでは外に出たがらなかった人が次も行くという気持ちになっています。認められて自信が付いたこともあるだろうし、信頼されたり、期待されていると感じられるのが大きいと思います。気軽に話ができる環境というのが一番かなと思います。

(保) 前職でちょっとだけ特別支援教育支援員の経験があつて、接し方さえ間違えなければ徐々に慣れてくれて同じように作業できるのを知っていたので、僕の方から声を掛けて指示を出したりしています。燃料や替え刃が欲しいといったこともメンバーさんが直接聞きに来てくれて、信頼関係ができていく感じがしますね。

(保)：石川地域資源保全の会  
(大)：特定非営利活動法人大夢



特定非営利活動法人大夢  
理事長 石川哲次 氏

一 危険も伴う草刈りへの参加はチャレンジングにも感じます。

(大) 草刈りに参加するメンバーさんは就労継続支援A型事業所に所属していて作業能力は高く、同じメンバーが繰り返し作業しているので、安全面で声を掛けることも今はあまりないです。やっぱり初めて機械を持たせるときは怪我をしたらどうしようと怖いですが、でもやっていくうちに慣れてきて、これまで機会が与えられていなかっただけでやればできるんだとこちらも気付いたという感じです。

一 今後の展望を教えてください。

(大) 大夢としては、将来的には農地を更に拡大したいですが、出荷量が増えたのでこれを維持していくのが当面の目指すところです。

(保) 高齢の農家からは場内の草刈りを手伝って欲しいと話があり、僕たちが仲介して大夢さんに紹介したことがあります。高齢化が進んで遊休農地も増えてくるので色んな仲介役にもなれたらいいなと思っています。参加者の確保に向けては、部活動の父母さんに声を掛けてみたいなと思っています。



特定非営利活動法人大夢  
サービス管理責任者  
比嘉清 氏



石川地域資源保全の会  
事務局 松田久俊 氏

## 連携のきっかけ（H25）

- ・NPO法人大夢が、農作業を通じた就労支援を行う場として就労継続支援A型事業所「プチ大夢」を開所するも、農業者からの理解を得にくく農地の確保が難航。
- ・地域の理解増進に向け、NPO法人大夢がボランティア活動を模索。NPO法人大夢の代表と当時のうるま市石川地域資源保全の会の事務局担当者が同級生であったこともあり、農道の草刈りへの参加を開始。

## Step 1（H25～）

### 草刈りを通じた理解の増進

- ・農道の草刈りに、うるま市石川地域資源保全の会から10名程度が、プチ大夢から月1～2回、15名程度が参加。
- ・障害があっても仕事ができる姿を見てもらえ、徐々に障害者福祉に対する地域の理解が増進し、農地の拡大にもつながっていった。

## Step 2（R1頃）

### プチ大夢等における生産活動の成長

- ・農地の拡大による出荷量の増大、近隣農業者生産分の袋詰め作業及び協力野菜としての出荷による出荷量の増大、施設外就労としての近隣農家への派遣など、プチ大夢等の生産活動に係る事業が拡大。
- ・これに伴い、農道の草刈りに派遣できる一回当たりの人数は抑制傾向に。

## NPO法人大夢（たいむ）の概要

- ・約900坪の農地で農業をしていた農家とともに平成24年に就労継続支援B型事業所「大夢」を開所。翌年には就労継続支援A型事業所「プチ大夢」、児童デイサービスを開所し、その後も近隣市村にて事業を展開。
- ・地域社会の中で自分自身の考えと力で、働く場所や社会参加の場所を築けるよう、子どもから大人まで一貫した福祉サービスの提供を行い、大人への就労支援、子ども達への療育支援に取り組む。
- ・就労支援では、ネギ、ニラ、ハーブ等の栽培、袋詰め、スーパーマーケット等へのお荷までの作業を実施。農地は8箇所約6,000坪にまで拡大。福祉分野の職員だけでなく農業関係者も雇用して利用者をサポート。

みんなで耕そう！

ノウフク

NOUFUKU PROJECT



（上2枚）草刈りは平坦な舗装道路脇で実施。敷地内での練習とは異なり、作業時間の制約がある中で一般車を含む車の往来にも注意をしながら複数の者と分担・連携して作業を行う必要がある。草刈り機が一番人気。

（下）作業機械の使用や消耗品の授受に当たっては、プチ大夢の利用者とするうるま市石川地域資源保全の会の事務局担当者である松田氏が直接やり取り。コミュニケーションがプチ大夢の利用者の自信にもつながっている。



## 体制図

NPO法人大夢  
（就労継続支援  
A型事業所  
プチ大夢）

相互理解の醸成により  
農地の賃貸借、  
農作業の受委託などの  
つながりに発展

農道の草刈りに参加

うるま市石川地域資源保全の会

農業者

うるま市石川土地改良区

あがりやま  
うるま市石川東山土地改良区

## Step 3（R3～）

### コロナ禍での活動

- ・コロナ禍で草刈りへの地域の農業者の参加も減少。
- ・予定していた範囲が終わらない場合は、協力してくれる農業者に個別に依頼すること。

## Step 4（近年）

### 現在の活動

- ・草刈りは例年10月頃から開始し年間で10回弱程度実施。プチ大夢からは、令和6年度、令和7年度はそれぞれ5回の草刈りに参加。各回、プチ大夢から5名程度、農業者が1～2名程度集まり、うるま市石川地域資源保全の会の事務局指示の下で草刈りを実施。
- ・プチ大夢の参加メンバーは固定で、草刈り機を使用した草刈り、鎌によるフェンス等のツルの除去、ノコギリやチェーンソーによる枝切り、送風機による刈草集め及びトラックへの積載の作業を分担して実施。施設職員1名が作業に同行し、安全管理（見守り）を実施。
- ・作業機械は、敷地内で練習を行った後に本番として農道で使用。

### 【主な交付金の使途】

- ・草刈りの日当
- ・燃料、刈刃 等

## 今後の展望

- ・引き続き協働による草刈りを通じて相互のつながりを維持しつつ、参加者の確保に向けた取組を検討。
- ・高齢化が進み遊休農地も増加することから、石川地域資源保全の会が地域の仲介役になれたらという思い。
- ・NPO法人大夢としては、近年増加した出荷量を維持できるように継続して取組。